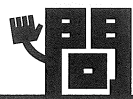


特集



い直そう、保育の中のあたりまえのこと 8

「親支援」とは言うけれど



インタビュー

まきの 牧野カツコ氏

宇都宮共和大学教授。お茶の水女子大学名誉教授。ご専門は
家族関係論・家庭科教育論。著書：『子育てに不安を感じる親
たちへ』ミネルヴァ書房（2005）、『人間と家族を学ぶ家庭科ワー
クブック』国土社（2000）ほか

子どもが減ってきたことと、子育てを苦手に感じたり忌
避したりする親が増えてきたことは連動していて、循環的
な関係になっている——この危機的関係に社会が気付き
始めた当初から、牧野先生は警鐘を鳴らし続けてきました。

今回のインタビューでは、「親支援」の枠組みが大きく変
化し、「支援」の考え方自体を問い直す必要を感じました。
これからの子育て環境を改善するには、父親の在り方が重
要なポイントなのだということが、育児から社会を変え得る
という明るい展望も示していただきました。

また、異なるお立場の三人の方からも、「私はこう考える」
コーナーで、それぞれのご意見を伺っています。

聞き手 浜口順子・菊地知子（本誌編集委員）

「親支援」は時代とともに変わってきた

浜口 一言で「親支援」と言っても、時代でずいぶん、考え方が変わってきているようですね。

牧野 そうです。そもそもの保育所や保育政策の始まりを考えると、まず、「保育に欠ける」子どもが対象でした。つまり、保育・養育ができない親の子どもに対す、養護施設とか乳児院など。これは歴史が古くて、家族が崩壊しているような場合に「代わり」の家庭を提供する、という形。それから、親が働きに出ていかなければならない家庭の子どもも「保育に欠ける」ということで、特に母子世帯などに對して、「代わる」という形で親支援は行われてきたと思います。そういう中で、「子どもはかわいそう」と思われてきて、できるだけ保育に欠ける状態にならないようにというのが世の中の考え方であったように思います。「母親が自分の都合で仕事をもつて働きに出るなんて」という風潮が、私のころもそうでしたが、ありました。特に〇〜三歳までの子どもに

ついては、家庭が保育すべきだっていう考え方。

浜口 「三歳児神話」といわれるものですね。

牧野 戦後は、高度成長経済で、雇用労働が圧倒的に増えてきますから、家庭が仕事の場所じゃなくなつて、父親が働きに出て母親は家に残る。日本では、三歳児神話と結び付けたり、性別役割分業意識を学校教育でも育てたりして、「男は仕事、女は家庭」は経済成長には大変うまく機能したといえます。

ところが、乳児死亡率が低くなり、子どもを丁寧に育てていこうという中で、急激に出生率が低くなります。子育て期間が短くなり、平均寿命もものすごく延びて、女性の仕事は家事育児だけでいいのか？と、女性の生き方が問われるようになりました。その中で、働き続けようという女性も増えてくる時代になりました。

もう一つ、親支援の変化として大きいのは、経済成長とともに、都会に出てきて、小さな2LDKの公団住宅などで子育てをするようになり、父親や、成長した子どもたち、親類の人たち、地域の人たち

とか皆が、子どもの顔を見てどこの誰っていうのがわかるような社会がなくなつた。その中で、お母さんたちが孤立して、子育てが非常に大変だつていう意識をもつようになる。昔の親から見れば、たった一人の子ども、何でそんなに大変なのかといわれるような状況が起つてきました。私が「育児不安」の研究を始めたのが、一九八〇年代初めなんです、一九七〇年代の経済成長ののつけにそういう状況が起つてきていて、子どもの夜泣きがひどく、上下左右の集合住宅に聞こえちゃいますから、困つた母親が毛布をかぶせて、気が付いたら子どもが窒息死していたというような事件が起つた。

浜口 それは事件として報道されたのですね？

牧野 はい、子殺し事件になるわけですけど、三歳児神話が一般的だったころには、何という冷たい母親か、何でそんなことが起つてしまうのか、というふうに。でもよく調べて見ると、一生懸命子育てをしているお母さんは非常に悩んだり苦しんだりしている。そりゃそうですよね。〇歳の子どもを産

んでみるまで、抱いたこともない、こんなに手間がかかるっていうことに気付く体験もない。窒息死させられないまでも、子どものほうもすごく息苦しい時代になったのではないか。幼稚園に入れば、お母さんの前では「いい子」なのに、入園した時、行きたくないと言つたり、コミュニケーションが取れなかつたりとかで、また、母親が不安になる。

浜口 密室の中の保育ですね。

牧野 はい、子どもにとってはある種の「保育に欠ける」状態だと思います。一歳、二歳になったら外へ出たいし、子どももお友達が必要だし、何より大事なのが、お母さんがいろいろ語り合える友達が必要。育児不安の研究をしてみると、お母さん自身の友人関係、ネットワークというのが育児不安を低めるってことがわかっています。そして、父親が育児に責任をもつていて、育児を母親一人の仕事と



は思わないっていうことがすごく大事なんです。私も、その中で、「子どもの発達と父親の役割」について研究を行ったり、家庭科の男女共修が必要だ、と訴えることになるのですが。

親支援は社会にとってプラス

浜口 時代とともに、親支援の対象が、すべての親にまでぐっと広がった印象です。

牧野 そう。これについては、行政はまだ対応が遅れています。親たちが自分たちで子育てサークルをつくったり、子育て広場をつくり始めたり、行政に要求したりし始めています。専業主婦の家庭、特に三歳未満の子どもの家庭についても支援が必要であると考えられるようになりました。

先日、都内のある市の子ども政策課の方からお話を伺いました。そこは育児休業制度がかなり進んでいる自治体ですが、待機児童対策で〇歳児の保育は国の優遇政策があり、〇歳児保育に力を入れてきたそうです。親としては、〇歳を過ぎて後から入れよ

うとしても定員枠が空かないので、無理してでも早く仕事に復帰して、〇歳から保育園に入れる人も少なくないということでした。

浜口 一歳児以上で復帰、というのを制度的な基本にしてしまえば、気楽に休めるんですね。

牧野 そうなんです。いろいろな事情で〇歳から働きたい人もいますし、働かなければならない家庭の親たちもいます。しかし、母親が家庭にいて〇歳の子どもは、親と二人だけでいいかっていうと、これも疑問です。どんな言葉を覚えていきますし、たった二人で向かい合っていたら、本当に子育ててきついのです。子どもが〇歳でもお友達と遊べる、お母さんも友達付き合いができる、ちよっとお茶を飲んでほっとできる、そういう場所が必要です。いわゆる「子育てひろば」といわれているものが各地にできまして、そこでは相談できる人もいるという、新しい親支援施策になってきました。

スウェーデンなどの育児休業制度が整っている国では、育児休業を取らせることが、経営や商品開発

などいろいろな会社の活動にプラスになるという考え方をもつようになっていきます。十年くらい前に、ドイツの某市の市長さんが育児休業を取って、ベビーカーを押して繁華街に出ている記事を見ました。ここで市民の生活や子どものことを学んで、いろいろなことに気付いてそれを行政に生かせるという話を聞いて、当時、本当にびっくりしました。育児の経験をするということの大切さを社会的に認めていけば、もっと自由に会社の体制が柔軟になるだろうし、そこに育児休業を取っている人のための手当がいくつていうようなことが親支援なんですよ。

自分の子ども、社会の子ども

菊地 今回のテーマの「親支援」の「支援」という言葉ですが、親目線でも、子ども目線でも、家族目線でもないのではないか、という問題意識がそもそもあったのです。社会のまなざしとして、「助けてやる」的なまなざしが変わるかもしれないと。子どもにとって「今どうしたらいいのか」という時

に、心を寄せる人が親だけではないということがとても大事なことだと思います。

牧野 本場にそのとおりです。本田和子先生は「子どもへのまなざし」という言い方をされますが、社会全体が子どもをどう見ているか、とか、社会が子どもを育てているということが大事なことです。保育に関して言うと、私はやはり子どもの権利条約の中にある「子どもにとっての最善の利益」が基本と思います。子どもが一番中心にあると思うんですね。大変気になるのが、延長保育とか〇歳児保育という、保育の要求の拡大ですね。それから病児保育。働く母親から見ると、責任ある仕事をするようになればなるほど、病児、特に伝染病にかかる二週間くらい保育園に行かなくなるのは本場に大変です。介護の場合もそうですけど、やっぱり小さい子どもを残して、しかも病気で体も弱っている時に、仕事に行かなければならないというのはとっても辛いことだと思う。でも基本的に、子どもにとっての最善の利益が重要ですから、子どもが良いケアを受けら



▲牧野カツコ氏

れるということが大事なことで、基本的には子どもが病気の時には休める環境、それが母親の職場での不利益にならないというような環境がつくられていかなければならないと思います。

浜口 「子どもにとっての最善の利益」が、「個々の親が考える、わが子にとっての最善の利益」にすり替えられるという誤解がありますね。今の日本では行政側がことさら親の責任を強調する印象があり、十分な保育環境を保障するより先に、「親が自分で考えて、お子さんにとって一番いい保育を選んでください」という響きがあります。その中で親も子どももますます追い詰められているように思えます。客観的な調査や専門的な研究に基づいた知見を行政がもっと活用して、この日本の子どもにとって最善で

ある保育環境を、責任をもつて実現することが必要ですね。

牧野 とても大事なことだと思います。日本の場合は、長く子育ての責任を家族に置き

てきました。それこそ明治以降の家制度の時代には、子育ての責任を家長に置き、戦後は母親一人に置いて、ということでも来ました。ですから、子どもにとっての最善の利益を、母親は自分にとっていい子に育てること、と考えやすい。父親も一緒に密室の家族にとつての最善の利益ということになりやすい。そういう危険があります。でも、子どもの権利条約が目指しているところは、社会の中の次世代という子どもなんですよね。つまり「あなた一人の子どもではないんですよ。社会でいろいろな活動ができるみんなの子どもを、みんなで育てていくのですよ」ということが徹底されていかなければならない。

育児が楽になるきっかけ

菊地 子どもが元気で明るく聞き分けがよいような時には、親は自分の力だけでうまく育てられているように思いたくなる。でもそれは錯覚で、本当にしようがないな、どうしよう、と思うような時に、他の子どもや周りのお父さんお母さんに、「意地悪する

ような子じゃないよ」って言ってもらったりすると、この子は本当に、周囲に生かされているのだと思える。ガチガチの家族主義や家父長制の歴史を今なお引きずる中であれ、血縁に縛られないつながりや、そのつながりの中でこそわが子や自分が生かされている、と実感することで、風穴がしつかりあいていくことがわかるように思います。

牧野 そうですね。私は、育児不安の研究において、不安が強い親の子どもはマイナスだというようなことはあまり調査したくなかった。というのは、まだ三歳段階で先がどうなるかまったくわからないのに、そこで子どもを固定的に見てしまうことは危険ですから。それに、子どもはどんどん変わりますから、三歳児の親にとっては、親が変わることのほうが大事なことだと思つて。

でも、お父さんが育児に参加することは子どもにとってプラスだよ、っていうことはやっぱり言いたいと思いました。『子どもの発達と父親の役割』（ミネルヴァ書房 一九九六年）という本の中で、家庭教

育研究所の方々と一緒に、三歳の子どもの発達についてかなり精度の高いデータを集め、社会性、情緒性、言語などいろいろな側面の発達を調べたら、子どもとかかわりの深い父親の子どもが、全体的に発達が良いという結果が出ました。子どもとかかわるその柔軟性の高さとか、臨機応変に子どもに対応ができるか、ということ、会社の中で要求される性質と違うものです。母親が接していてもそうですけど、子どもってどう動きだすがわからない存在で、それとかかわることの面白さっていうのを体験することが大事だと思うんですね。紋切型に接していても子どもは泣き止まなかったりしますからね。別の手法を考え出したりして、子どもが嫌だと言った時に子どもをなつかせることができるのか、子どもの関心をそらせてうまく関係がもてるのか、そういうようなこと。

浜口 それ、かなりな父親ですよね（笑）。最近、テレビのワイドショーとかで「イクメンお父



▲浜口順子氏



さん」の特集などを見ると、「お風呂に入れてくれる」とか、「おむつを替える」とか、何をしてくれるかが注目されます。でも、今おっしゃっていることはそういうことじゃないですよね。

牧野 まずはそこもやってもらわないと(笑)。いいところ取りでもいいんですよ、最初は。母親は、育児しているいろいろあって、楽しいところと面倒な手間がかかることと両方あることを知っているから、こんなに大変なのよ、こっちもやってよってすぐ言いたくなります。でもまずは楽しんでもらって。楽しみの中で、臨機応変に対応しなくちゃいけないってことに父親も気付いて、自分の違う感覚が働いていくという体験をしてほしいと思います。

お父さんが生活の中で動くこと

浜口 何もしないお父さんでも、夫婦が仲良かったらいいんじゃないかと思いますが。

牧野 それも悪くはないんですけど、弱いですよ。何で絆が深まるかっていうと、手足が動くというこ

とが大事なですよね。やっぱり人間は家庭の中で生命維持のために食べたり着たり住まったりっていう生活をしています。子どもも生きていくためには、笑顔だけに接して空気を食べているわけにはいかないうから、やっぱり着る、食べる、寝る、住まう、そこを快適に整えられる環境をつくるっていうことはすごく大事。お父さんだけのことで言っていられません。お母さんだって、何でも既製品で何も手間がかかることをやってこなかったから育児が辛いついていう面もあるんですよ。昔の女の人は、農作業とか家事労働とかありとあらゆることを家の中で労働してなくちゃいけなかった。それは子育ての延長線上で家事労働をやってきた体にとっては、子どもの衣服を縫うところからとか、寝かせつけるとか、食べ物を作るとか、いろいろなことが大変だったけれど、ほっと終わって寝顔を見て休まるっていうそういうのがあって、労働があつて休みと楽しみもあるわけだから。

浜口 動いて生活すること自体が大事だということですね。

菊地 震災以降、福島県の保育園の保護者の方たちと

つながりができて、今年四月の終わりに二年ぶりのお花見をするという時にも仲間入りさせてもらいました。夜勤明けだという若いお父さんが、自分の子どもだけでなく、よその子にもひとつつかれて遊んでいたります。ご自分の生活もいろいろと大変な中で、それでもそうやって集い、子どもたちとかかわっている姿に、希望を見た感じがしました。

また、集いの中心にいるお父さんが別の時に、「僕、イクメンっていう言葉は嫌いなんですよね」とおっしゃった。イクメン代表みたいなお父さんなんですけど（笑）。「だって、かわりたくたってわが子とかかわれない人だっていっぱいいるじゃないですか」とおっしゃって、とても共感しました。本来子育ては、わが子に向き合い自分を高める、というような狭いことではなく、わが子よその子の別なく人が人の育ちにいや応なくかわってしまう。目の前にいる子どもの先にもたくさんの子どもが居、子どもを巻き込んだ人の社会があることが自ずと見える。そ

ういうものではないかと思っています。

その日、池に落ちて濡れねずみになった子がいたら、皆でやいやい「母ちゃん来たら怒られるぜ」とか「まだ少し陽があつてよかった」「うち、シャツなら替え持つて

るよ」とか言いながら、その場の総力を挙げて着替えをさせているんです。そしてお母さんが来てやっぱり怒られたら、皆で一緒にしょぼくれたりして。そういうつながりの中で子どもたちが育っているのだと、感心したり、安心しました。

牧野 アメリカの歴史社会学者ステファニー・クーンツが、「子育てという大切な仕事を両親だけに任せてはおけないと考える社会の中で子どもは一番よく育つ」と言っています（『家族という神話』筑摩書房一九九八年）。つまり家族が閉じていないということ。社会全体で子育てをしようと考える社会、なかなか難しいですが、福島だけでなく広がってほしいですね。



▲菊地知子氏

（二〇二二年七月五日）